

# 6

## 総合教育力の向上を目指す学校の 取り組みの発展～学校改革への針路～

大阪市立大学大学院助教授 木原 俊行

### はじめに

本章では、総合教育力の向上を目指す学校が、その取り組みを発展させる際のプロセス、すなわち学校改革の針路を提案したい。もちろん、それは、子どもたちの「総合」学力(教科学力、学びの基礎力、生きる力)の実態によって異なる。学校には、子どもたちの学力実態に応じた改革の枠組みやデザインが必要である。それは自明であると思われるが、不思議なことに、学力問題が語られる際に、こうした考え方はあまり重視されてこなかった。筆者らの総合学力研究会では、学力問題に関わる議論の画一性に対して疑問を抱き、学力とそれを育む主体や方法の多様性、そして両者の関連性について、各種調査を企画・運営して、追究してきた。

本章ではまず、本研究会が実施した「総合学力調査」の枠組みに立脚しつつ、調査受検校の子どもたちの学力の実態を、いくつかの典型的なパターンに整理し、同時にその向上の道筋を考察し、モデル化する。

次いで、学力パターンごとに、それが、教師・学校・家庭の教育力とどのように関連しているかを探る。本研究会では、これまでの章で述べてきたように、教師の指導力、学校の経営力、そして家庭の教育力に関するデータを「総合教育力調査」を実施して収集し、それらと子どもの学力の連関を明らかにできる分析枠組みを用意した。それを活用して、学力と教育力の関連について、代表的なパターンを導出する。

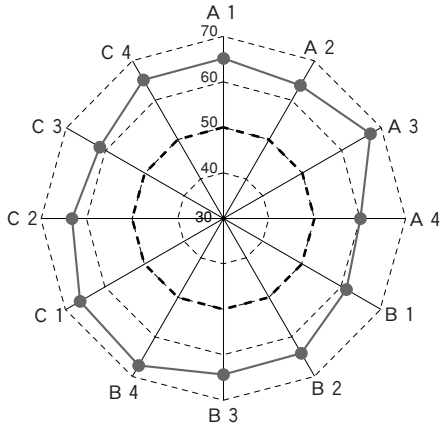
そして最後に、総合教育力の向上を目指す学校が歩むべき、学校改革の針路を考察する。学力向上は、学校改革の営みの継続・発展によって、花開く。いかなる取り組みから始めるとよいのか、どのような取り組みを強化すべきかななどを視点として、学力向上への取り組みの段階をモデル化するとともに、その具体的ステップや内容も提案する。

### 1 学力の典型的なパターン

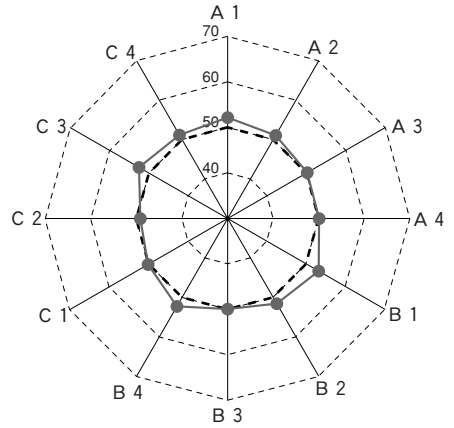
筆者らは、子どもたちの総合学力を3つの要素から成るものであると定義している。教科学力(関心・意欲・態度、思考・判断、技能・表現、知識・理解)、学びの基礎力(豊かな基礎体験、学びに向かう力、自ら学ぶ力、学びを律する力)、そして生きる力(問題解決力、社会的実践力、豊かな心、自己成長力)である。これら3つの学力のそれぞれについて、学校ごとに子どもの得点をまとめ、それを偏差値に換算した。すべての学力要素が平均値を上回る場合から、その反対にいずれの学力要素とも平均値を下回る場合まで、受検校は、理論的には8つのグループに分かれることになる。

実際には、次のような5つの基本パターン(理想型、平均型、不振型、特色型、弱点型)が確認された(図表6-1-1～図表6-1-5)。

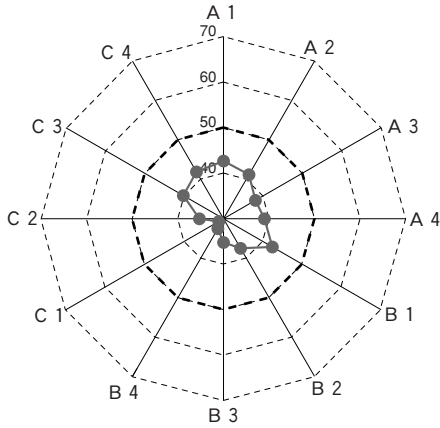
図表6-1-1 理想型の学力パターン



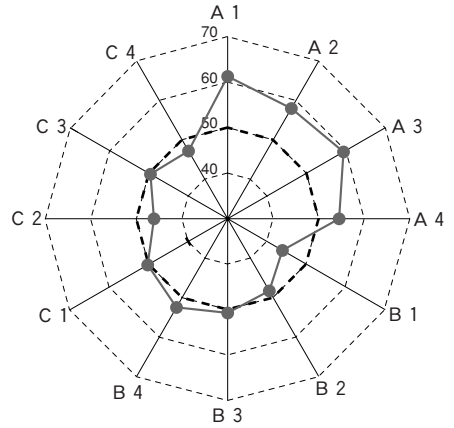
図表6-1-2 平均型の学力パターン



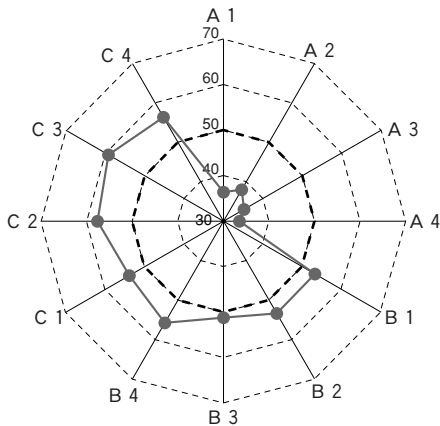
図表6-1-3 不振型の学力パターン



図表6-1-4 特色型の学力パターン



図表6-1-5 弱点型の学力パターン



- |               |            |
|---------------|------------|
| <b>教科学力</b>   |            |
| A 1           | : 知識・理解    |
| A 2           | : 技能・表現    |
| A 3           | : 思考・判断    |
| A 4           | : 関心・意欲・態度 |
| <b>学びの基礎力</b> |            |
| B 1           | : 豊かな基礎体験  |
| B 2           | : 学びに向かう力  |
| B 3           | : 自ら学ぶ力    |
| B 4           | : 学びを律する力  |
| <b>生きる力</b>   |            |
| C 1           | : 問題解決力    |
| C 2           | : 社会的実践力   |
| C 3           | : 豊かな心     |
| C 4           | : 自己成長力    |

(1) 理想型

あらゆる学力が平均値を大きく越えている学校である。学力形成において、何ら問題がない。小中学校ともに、このような学校の存在が確認された。

## (2) 平均型

3つの学力のいずれについても、平均値近くの得点を得ている場合である。学力実態に大きな問題がないとも言えるが、学力形成について、学校としての特色に欠けるとも言える。

## (3) 不振型

(1)とは対照的に、あらゆる学力の得点が平均値を大きく下回っており、学力向上への取り組みが焦点の課題となっている学校である。

## (4) 特色型

ある学力だけが、平均値を大きく越え、その充実が目立つ一方で、残る学力については、それほど高い得点が得られていない、ないしはむしろ平均値を下回っている場合である。後者の学力の向上が教師たちの課題となる。

理論的には、教科学力、学びの基礎力、生きる力のそれぞれについて、それが特長となる学校が考えられるが、調査結果によると、教科学力の高さを誇る場合がこのパターンの大半を占めた。

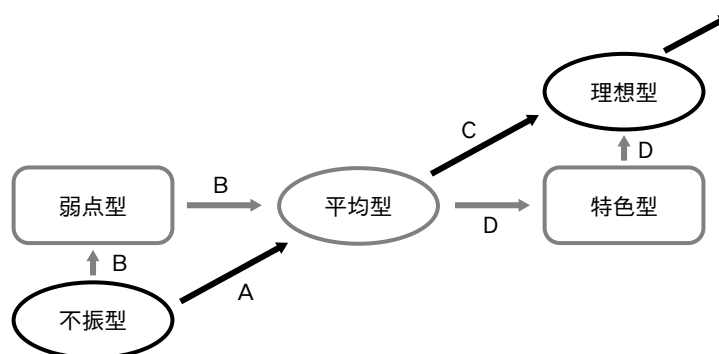
## (5) 弱点型

(4)とは反対に、ある学力だけが、平均値を大きく下回り、その向上への取り組みの緊急性が高い場合である。このパターンには、教科学力が学校の弱点となっている場合と、学びの基礎力が問題視される場合とが登場してきた。

これらの学力実態は、**図表6-1-6**に示される関係構造を有していると思われる。まず、「不振型」からの脱却については、2つのルートがありうる。それは、「平均型」に至る際に、3つの学力をバランスよく高めていくルート(A)と、1つないしは2つの学力に特化して学力向上に努め、その繰り返しによって次第に弱点を少なくしていくルート(B)である。

また、「平均型」から「理想型」へと学力向上を進展させる際にも、3つの学力をバランスよく育てていくルート(C)と、ある学力に限定してその充実を努め、その繰り返しによって漸次理想的な学力パターンに近づくルート(D)が認められよう。どのルートを進んで理想型の学力パターンに至るのかは、当然のことながら、学校の置かれた条件や学力向上を目指した実践史によって、変わってくる。

図表6-1-6 学力パターンの関係構造



## 2 学力と教育力の連関

学力と同様に、教育力の実態にも、いくつかの典型的なパターンがある。筆者らは、教師の指導力(授業の土台づくり、学習指導の方法、学習の方向付け)、家庭の教育力(規律やしつけ、家庭での交流・支援、保護者自身の学びへの参画)、学校の経営力(校長のマネジメント、組織・体制の連携強化、教育資源の有効活用、教育課程の整備・充実)についても、「総合教育力調査」から学校別の得点を算出し、それを偏差値に換算して、リーダーチャートを作成した。それにより、教育力の実態をパターン化することを試みた。

その結果を踏まえて、本節では、先の学力パターンと教育力パターンの連関について、整理してみる。子どもたちに、バランスのよい学力を身につけさせるためには、つまり彼らに「総合学力」を育むためには、学力と教育力の実態を関連的に扱うことが大切であると考えられるからである。

### (1) 「理想型」に見られる教育力パターン；「充実型」

予想に難くないが、理想型の学力実態を示す学校の教育力は、教師の指導力、学校の経営力、そして家庭の教育力のいずれもが平均値を上回り、極めてバランスがよく、教育力が皆充実している(充実型)。**図表6-2-1**は、その代表例である。教育力の充実が学力を理想的なものに至らしめるという好循環がおこっている、学力向上を目指す学校の教育力のモデルパターンである。

### (2) 「平均型」に見られる教育力パターン；「伝統傾斜型」

学力実態が平均型を示す学校の教育力も、そう大きな問題があるわけではない。しかし、教師の指導力、家庭の教育力、そして学校の経営力の領域のうち、子どもたちの問題解決的な学習を支援する術が共通して不十分なケースが確認された(**図表6-2-2**)。プロジェクト学習、保護者の学習参加、リソースの活用・管理といった、新しい学びのスタイルへの挑戦に、教師、学校、家庭が難色を示している。こうした学校では、教育力の発揮が伝統的なものに偏重しているため、子どもたちの学力が理想型に至っていないと推測される(伝統傾斜型)。

### (3) 「不振型」に見られる教育力パターン；「停滞型」「学校機能せず型」「教師孤立型」 「学校の経営力不足型」「ビジョンの具体化待ち型」

3つの学力のいずれにも問題がある不振型学力パターンに該当する学校は、学力向上への取り組みの必然性、緊急性が高い。しかし、学力が伸び悩んでいる原因は、一様ではないようだ。「総合教育力調査」の結果、不振型の学校の教育力パターンには多様性が確認されたからである。それらのうち、複数の学校において確認された、代表的なものをリストアップすると、次のようになろう。

まず、自明とも言えるが、学力実態に呼応して、教師の指導力、学校の経営力、そして家庭の教育力のいずれもが平均値を下回り、教育力全体が停滞している学校が確認された(停滞型、**図表6-2-3**)。教師、学校、家庭の活性化が急がれる学校であるが、幸いにして、そうした学校の数は、そう多くはなかった。

次いで、ある教育力は高いのに、残る2つの教育力が低い場合があった。1つは、「学校機能せず型」と呼べる学校である。これは、家庭の教育力は高いのに、教師の指導力と学校の経営力が劣っている場合である(図表6-2-4)。続いて、教師の指導力は調査において高得点を示しているのに、それに比べて、家庭の教育力や学校の経営力が平均値を大きく下回り、問題視される、「教師孤立型」も存在した(図表6-2-5)。

さらに、特定の教育力だけが低い、言い換えれば、それだけその教育力が深刻な問題をはらんでいる場合も出現した。それは、教師の指導力や家庭の教育力ではなく、学校の経営力だけ脆弱な場合であった。「学校の経営力不足型」と名づけられよう(図表6-2-6)。ただし、より細かく見ると、「学校の経営力不足型」の教育力パターンの中にも、いくつかのタイプがあるようだ。例えば、学校の経営力には4領域が設定されているが、それらのうち、経営方針は明確なのだが、その具体化(リソース、カリキュラムの整備など)に失敗しているといったケースが確認されたからである(ビジョンの具体化待ち型、図表6-2-7)。

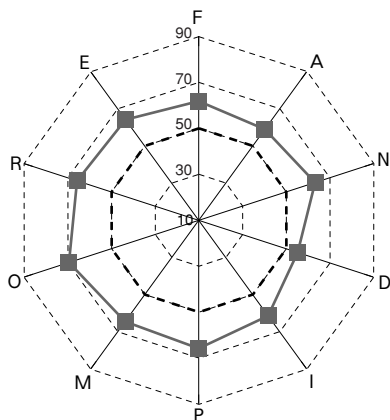
#### (4) 「特色型」に見られる教育力パターン；「家庭の教育力不足型」

今回は教科学力の高さを誇る場合を意味することになるが、特色型学力パターンを示す学校の教育力パターンとして代表的なものは、図表6-2-8のとおりである。すなわち、学校任せで、家庭でのしつけや関係性の構築に問題が有る学校である(家庭の教育力不足型)。

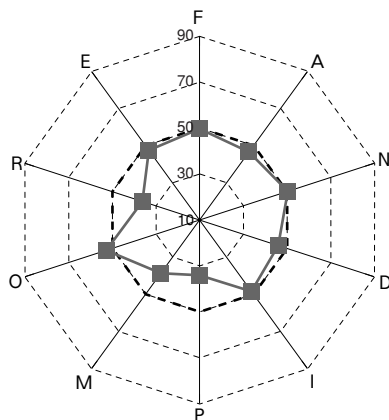
#### (5) 「弱点型」に見られる教育力パターン；「教師の指導力不足型」「学校の経営力不足型」 「家庭の教育力不足型」

調査結果に依れば、弱点型の学力パターンを示す学校の教育力パターンには、はっきりとした傾向がある。3つの教育力のうち、特定のものが不足気味なのである。例えば、教科学力に問題がある学校については、教師の指導力不足、学校の経営力不足、そして、家庭の教育力不足の3タイプが確認された(図表6-2-9、図表6-2-10)。

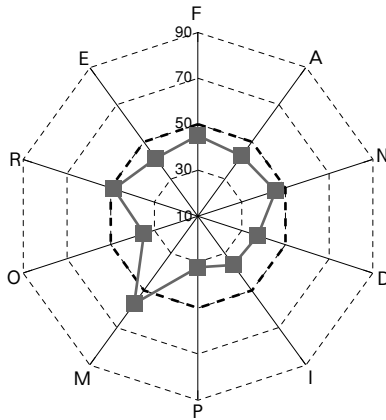
図表6-2-1  
「理想型」の教育力パターン(充実型)



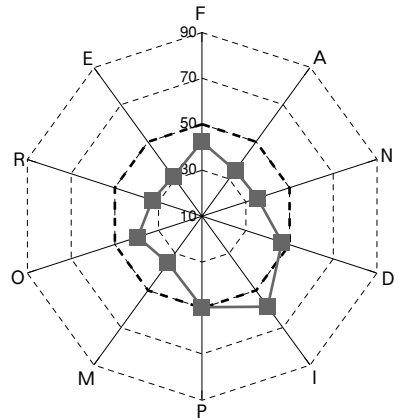
図表6-2-2  
「平均型」の教育力パターン(伝統傾斜型)



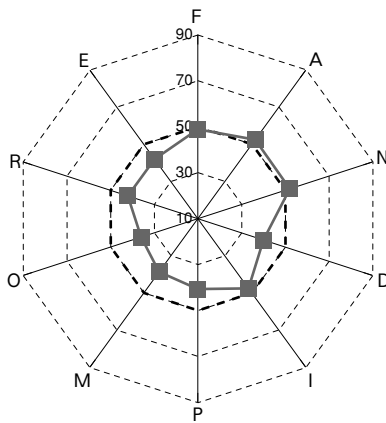
図表 6-2-3  
「不振型」の教育力パターン(停滞型)



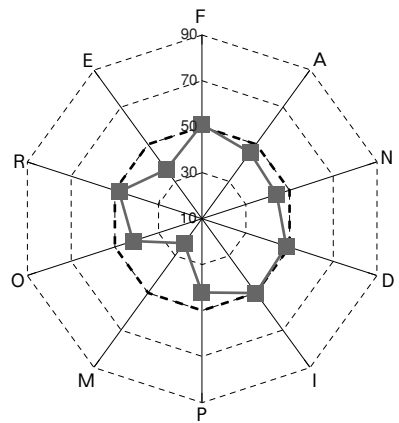
図表 6-2-4  
「不振型」の教育力パターン(学校機能せず型)



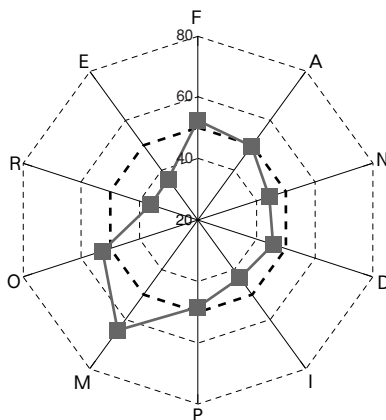
図表 6-2-5  
「不振型」の教育力パターン(教師孤立型)



図表 6-2-6  
「不振型」の教育力パターン(学校の経営力不足型)

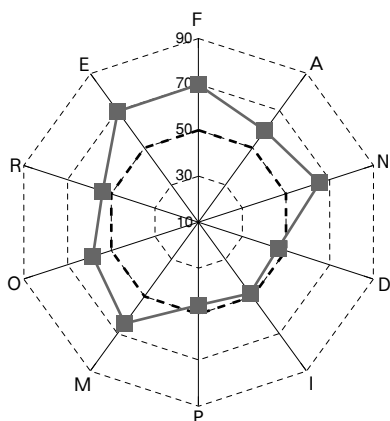


図表 6-2-7  
「不振型」の教育力パターン(ビジョンの具体化待ち型)

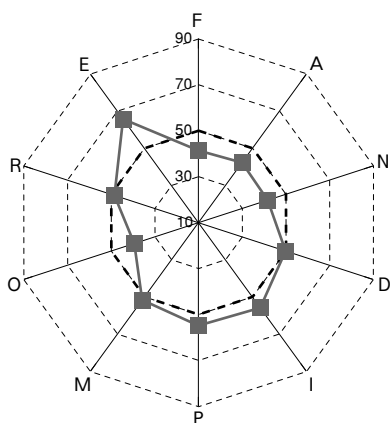


- |        |              |
|--------|--------------|
| 教師の指導力 |              |
| F      | : 授業の土台づくり   |
| A      | : 学習指導の方法    |
| N      | : 学習の方向づけ    |
| 家庭の教育力 |              |
| D      | : 規律やしつけ     |
| I      | : 家庭での交流・支援  |
| P      | : 学びへの参画     |
| 学校の経営力 |              |
| M      | : 校長の経営方針    |
| O      | : 組織・体制の連携   |
| R      | : 教育資源の有効活用  |
| E      | : 教育課程の整備・充実 |

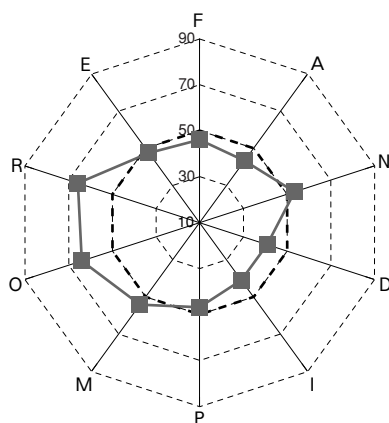
図表 6-2-8  
「特色型」の教育力パターン(家庭の教育力不足型)



図表 6-2-9  
「弱点型」の教育力パターン(教師の指導力不足型)



図表 6-2-10  
「弱点型」の教育力パターン(家庭の教育力不足型)



以上のような学力と教育力の関係性、両者の関連パターンをまとめたものが、図表 6-2-11 である。

図表 6-2-11 学力と教育力の関連パターン

学力パターン	教育力パターン	教育力の柱		
		教師の指導力	家庭の教育力	学校の経営力
理想型	充実型	○	○	○
平均型	伝統傾斜型	△	△	△
弱点型   特色型	家庭の教育力不足型	○	×	○
弱点型	教師の指導力不足型	×	○	○
不振型   弱点型	学校の経営力不足型	○	○	×
不振型	教師孤立型	○	×	×
	学校機能せず型	×	○	×
	停滞型	×	×	×

### 3 総合教育力の向上に向けた学校改革の針路

#### 1 学校改革の基本原則

不振型や弱点型の学力パターンから脱却し、理想型の学力パターンを示す学校に変貌を遂げるためには、いかなる学校改革に着手すればよいのであろうか。その針路を明らかにするための手がかりを、前ページの図表 6-2-11 が表す学力と教育力の関連的図式が与えてくれよう。

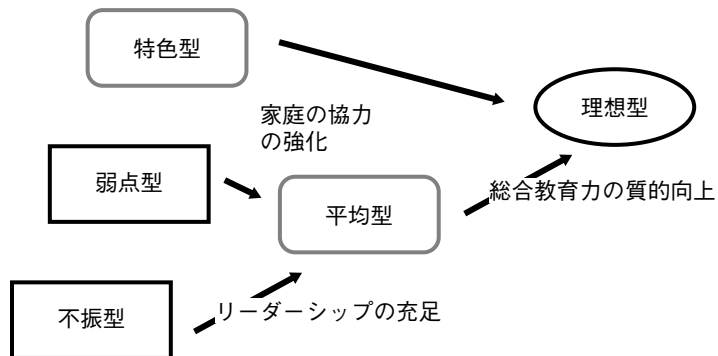
不振型と弱点型の多くの場合に共通しているのは、学校の経営力不足、すなわち、学校長等のリーダーシップ不足だ。これの充実が、子どもたちの学力向上への絶対的条件であることを、今回の調査研究は浮き彫りにしてくれた。

弱点型から平均型へ、また特色型から理想型へと学力パターンを進化させる際に鍵を握っているのは、家庭の教育力であった。子どもたちの学力をよりバランスのよいものにする時には、教師、それを促す学校の取り組みだけでは十分ではなく、家庭の協力が欠かせないことを、先の表は示唆している。

平均型と理想型の学力パターンを示す学校の違いは、教育力の量ではなく、質である。それはしかも、特定の教育力の柱に限定されるものではなく、あらゆるものに共通する問題である。より具体的には、今日的な学力の育成に資する、教師による「プロジェクト的指導」の手だての充実、それに対する学校・家庭によるサポート体制の整備を意味している。

以上のような基本原則を踏まえると、総合教育力の向上モデルは、**図表 6-3-1** のように表現されよう。

図表 6-3-1 学力向上と教育力向上の関係モデル



#### 2 不振型からの脱却

学力向上のための学校改革の針路をより詳細に、また具体的に提案してみよう。まずは、最も問題視される、不振型学力パターンを示す学校の教育力の向上の段階性、その内容について言及する。



❶でも確認したように、学力全般に問題を抱える学校は概して、学校の経営力が脆弱である。まず、それを克服する必要がある。学校長のリーダーシップを高めるためには、いくつかの方策がある。1つは、研修による力量形成の促進である。学校長には、行政による管理職研修、各種のセミナー等への参加を通じて、新しい時代に求められる学校リーダーとしての能力・資質を高めてもらいたい。

同時に、学校長がリーダーシップを発揮する機会を学校が開拓する必要もある。学校長のリーダーシップが弱いというのは、彼らの能力・資質が低いことを意味するとは限らない。それを発揮する術や舞台が欠如していることが原因となっているかもしれないからだ。第1章でも提案したように、例えば学力向上委員会を学校内に設置する、公開授業研究会に保護者が参加して学校長と意見を交わすといった、学校長と教師、保護者のコミュニケーションの拡充によって、学校長の潜在的能力が顕在化する可能性も無視できない。

また、不振型学力の原因となっている教育力の実態は、先にも述べたように、多様である。したがって、学校の経営力の充実だけでよいのか、その他の教育力にも課題があるのかを同定することも必要になる。それに際しては、本書で示したような、「総合学力調査」と「総合教育力調査」の結果が重要な判断材料となろう。それらの分析が難しい場合には、大学研究者や教育問題コンサルタント等の「学力向上アドバイザー」の支援を仰ぐとよいであろう。

「学校機能せず型」の教育力パターンを示す場合を例にして、さらに具体的な学校改革ステップを考えてみよう。このタイプでは、教育力向上のために、学校の経営力に加えて、教師の指導力の充実が課題となる。これも学校長の場合と同じく、行政研修や校内研修、さらには自主的な授業研究サークル等への参加を通じて、自らの力量形成に努める姿勢が教師には求められよう。

そして、そうした研鑽と並行して、個々の教師たちの学力向上への営みをサポートする体制を学校が整える必要もあろう。これは、次のような段取りで進められるべきものだ。まず、各教師の指導について、自己・相互・外部評価により、その現状と課題を明らかにしなければならない。学力向上に関わる教師の指導力の内容は幅広い。本研究会が作成した「総合教育力調査」では、教師の指導力に、学習の土台づくり、指導の土台づくり、プログラムの指導、プロジェクト的指導、学習ガイダンス、形成的評価と指導という、6カテゴリーを用意してみた。例えば、この枠組みを参考にして、各教師が自分の場合はどのカテゴリーが特に問題になっているのかを考え、指導力向上に関する課題の優先順位を同定するとよいだろう。次いで、重要な課題については、学校としてのサポート方法(例えば、授業交換、教材の共有など)を構想し、それを実行するとともに、例えばベテラン教師が若手教師にメンタリングやコーチングを展開するなど、教師間の日常的な学び合いを保障することが望ましい。しかしそれでもなお、指導力の向上が実現しない場合には、例えばIT活用の指導補助者を学校に招くなど、学校組織の拡充という、指導力不足を補うアプローチが採用される必要も出てこよう。

なお、以上のような改革をどのような学力を対象として推進するのかについても、学校は、意思決定、判断しなければならない。学力は多様な要素から成るものであるが、一度に多くの改善を求めても、そう簡単には成果があがらない。それでは、教師も学校も家庭も疲弊するばかりである。筆者は、不振型からの脱却の近道としては、学びの基

礎力や教科学力のうち、知識・理解や一部の技能を対象とするものが得策であると考えられる。前者は、家庭のサポートを得やすいし、後者はその育成方法が明確な上、短期間で成果を確認できるからである。つまり、それらの学力をターゲットにすれば、教師も学校も家庭も、学力向上の取り組みの意義、可能性を実感できる。それが、学力向上への次なる取り組みへの姿勢を高めてくれる。

### 3 弱点型から平均型、特色型から理想型への進展

学力に弱い部分があったり、まだ十分ではない部分があったりする場合には、当然のことながら、学校は、バランスのよい学力を求めて、改革に着手することになる。前述したように、今回の調査結果からすると、その鍵は、家庭の教育力が握っていると言える。

そこで、家庭の教育力を高めるステップについて提案してみる。まずは、学校から家庭に向けて、学力向上に関わる情報を提供するとよいであろう。今学校で学力向上を目指して何をしているのか、いかなる協力を必要としているのかなどを、学校通信で、学校ホームページで、保護者会で、伝えるのである。

続いて、家庭における子どもへの具体的な働きかけを学校から保護者にリクエストしてみよう。これも第1章で紹介したように、個人別学力プロフィールを配布して保護者と子どもとの対話を喚起する、宿題の点検シートを保護者にチェックしてもらうなど、保護者が子どもとともに学力向上に向けたアクションを起こすことを励まし、促すよう、学校は手だてをこうじるべきだ。

以上のようにして学校と家庭のパイプが太くなったら、保護者に対して、学校における学習の支援を要請するとよいだろう。すなわち、保護者による学習ボランティアである。既に、英国などでは、保護者や地域住民がアシスタントとして教科指導に参画し、様々な学習場面で、教師の負担を軽減してくれている。彼の地の学校では、玄関に、そうしたアシスタントの写真が、教師たちのものに混じって飾られていたりもする。それは、学力向上に対する保護者等の力がいかに大きいかを物語るものであろう。

### 4 平均型から理想型への転換

平均型学力パターンを示す学校と理想型学力パターンを描く学校の教育力の差は、プロジェクト的指導及びそのための連携や条件整備にある。それは、どのような段階を経て、成熟していくのであろうか。

まずは、教師の指導力の幅を広げることが目指されるべきだ。具体的には、総合的な学習の時間や特別活動などにおいて、つまり教科書のない学習において、プロジェクト的指導を試みるのがベターであろう。そして、それをよき布石にして、教科学習における、プロジェクト的指導の適用を構想し、実践するとよいであろう。この時、例えば「学期に1回」といった数値目標を立てて取り組むと学校全体にそうした指導法が浸透しやすい。

これと並行して、学校長等が、教師たちが各種のリソース、IT、人材などを十分に活用できるように、腐心しなければならぬ。また、その一環に、保護者の学習参加等が位置づくに違いない。先のアシスタント的な働きと違って、今度は、保護者に、地域の歴史や文化に関する語り部になってもらったり、環境改善運動の展開におけるコーチになってもらったりする機会が増えよう。すなわち、教師では子どもたちに提供できな

い(提供しづらい)学習活動のインストラクターとして保護者が機能することになる。

プロジェクト的指導に関する教育力アップのために準備する第2のステージは、教師たちが異質体験、とりわけ異なる授業づくりを試みている教師との交流や意見交換に挑戦することである。例えば、小中学生の合同授業、他地域の学校との交流学習といった舞台を得るならば、教師たちは、多様な授業アイデアにふれ、プロジェクト的指導に必要とされるものをさらに豊かに吸収していこう。それを、学校長などがリードする必要があるのは言うまでもない。彼らによる各種連携組織の開発と運用等に、教師たちの異質体験は支えられているからだ。

## おわりに

第1章において、「学力向上に王道なし」と述べた。それは、あらゆる学校に学力向上への地道な努力が必要とされていることを訴えるものであった。それに、本章の内容をぜひ重ねてもらいたい。つまり、「王道なし」とは、学校の数だけ、学力向上への道筋があるということをも意味していると、筆者は、主張したい。

学力実態に応じて、教育力向上の重点課題が変わる。また、それにも、段階、ステップがある。学力向上を目指した学校改革は、各学校が自らそのプランをデザインし、主体的にそれを遂行し、そして、自己評価するものだ。

こうした「それぞれの改革」の推進には、その点検、それを踏まえたアクションに役立つ、よきツールやパートナーが必要とされよう。学力やその育成主体・方法の多様性への配慮が繊細である、後者の点検項目が具体的であるという観点から、本研究会が提案している「総合学力調査」、「総合教育力調査」は、改革推進ツール・パートナーの好例となろう。